

にちよう文化

親鸞の妻

恵信尼

親鸞の妻である恵信尼が、実在か、架空かの論争に終止符が打たれたのは八十年余り前と、そう古い出来事ではない。

一九二一(大正十二)年、西本願寺の蔵から、現在「恵信尼文書」と称される十数通の資料が発見されたのである。

このうち晩年の住まいであった越後から、京都に住む末娘の覚信尼にあてた手紙十通は、親鸞の実像を表す資料として、多くの研究がなされた。一方で、無量寿経を仮名書きにした三枚半の断片は、前後は失われているため、あまり資料として注目されなかった。

山折さんは今、この断片に光をあてる。「もしかすると親鸞以上に念仏三昧であったかもしれない恵信尼の尊い姿が浮き彫りになる。非常に重要な資料なのです。冒頭の一部を記す。

宗教学者 山折 哲雄さんが語る ▶▶▶▶



恵信尼肖像画(部分 龍谷大学術情報センター大宮図書館所蔵)

よういなう 四こんいけひやくこんいしつー

「四こんいけ」は本来「紫金為華」である。「神」「仏」以外の文字は非常に当て字が多く、脱落も、なまりもある、という。「音読して覚えた経典を音の通り書写したからであつ」と山折さんは推測する。

当時流行の『今様歌謡』を

歌い上げるように、論語を素読するよきに、無量寿経を読み続けた恵信尼が見えてくる。その姿は、まさに親鸞の言う「ただ念仏により救われる」姿である。

「晩年、親鸞は知的な学問を離れ、大衆に心のありようを伝えようとした。しかし著作を見るとまた理屈にこだわっている。長年にわたって親鸞を支え、庶民の中に身を置いて庶民とともに歩んだ恵信

とは考えにくい。字に勢いがあり、非常に素朴な田舎人としての姿が見えてくる。親鸞が越後に流された折、その地で結婚した葦原の娘だったと推測できる。

庶民の中に身を置き、歩む

「庶民の中で、念仏三昧に生きたその人生が素晴らしい」と話す山折さん(京都市下京区のホテル)

「庶民の中で、念仏三昧に生きたその人生が素晴らしい」と話す山折さん(京都市下京区のホテル)

「庶民の中で、念仏三昧に生きたその人生が素晴らしい」と話す山折さん(京都市下京区のホテル)



やまおり・てつお 1931年若手県生まれ、東北大学博士課程修了。専門は宗教学、思想史。京都造形芸術大学学院長、国際日本文化センター所長などを歴任。著書に「愛欲の精神史」「近代日本人の宗教意識」など。

私流この偉人

京滋の歴史から

20

重要な「恵信尼文書」 念仏三昧を浮き彫り

山折さんは研究者として十数回転居を続けた。現在京都中心部の山鉾町に住む。ついのおすみかも京都になるだろうと考えている。

「でも、妻が言うんです。死ぬときには地元に戻りたいな、と。関西弁、京都言葉は東北育ちの私たちには言葉が...。越後の葦原の娘で、親鸞とともに関東と京都、越後を流浪した恵信尼にも同じ思いがあったかもしれない」(文化報道部 立川真悟)

約80年前に「恵信尼文書」が発見された西本願寺(京都市下京区、2001年撮影)



協賛別居で向かった越後は凶作、飢饉、河川の氾濫などに遭い、さらに自身も大病を患うこともあり、決して暮らした向きは良くなかった。それでも八十六歳でなくなるまで越後を離れなかったのは「おそく、所領問題を抱えていたからだろうか」。山折さんは考える。

えしんに(1182-1268年)鎌倉時代の浄土真宗の教祖・親鸞の妻。出身は京都と越後の両説があり、合わせて結婚時期も、親鸞の流罪前後の両説がある。三男三女の母で、末娘の覚信尼は京都東山大谷に御影堂を建設、本願寺の基礎を作った。「恵信尼文書」には親鸞の興味深いエピソードが多く記され、発見以来、重要な研究対象になっている。